

宗教通信 - 2

先日は久しぶりの授業でしたが、23期生がこの一年間無駄に過ごしたのではないと感じました。6校時という不利な条件の中で、集中力を切らさずに最後まで聞いてくれていた人が目について、心地よく話すことができました。心地よく居眠りしていた人もいたかも知れませんが・・・。

さて、ギリシア哲学というのはすごい昔のことで、日本で言えば縄文時代から弥生時代に移り変わる頃のことです。「そんな昔の人の考えなんか、時代遅れとちゃうん。なにせ科学がまったく発達していなかった時代で、原子のこともビッグバンも知らなかったやから、万物の根源とか言うてもわかるわけないやんか」と関西弁で疑問を持つ人もあるのではないかと、思います。

事実、よく知られていることですが、ヨーロッパ中世では重いものの方が軽いものより早く下に落ちるというアリストテレスの説が信じられていたのを、ガリレオがピサの斜塔からバスケットボールとテニスボールを同時に落としてみて、同時に着地することを確かめて、この説が間違っていたことを証明した。この種のことから、古代ギリシアの哲学やそれを継いだ中世のスコラ哲学など、近代に始まる自然科学のめざましい発展によって、とっくの昔に克服されたと考えている人も少なくありません。

また「歴史を勉強すると、昔より今の方がずっと進歩していることは否定できないのではないかと」と標準語で考える人も多いでしょう。18世紀のフランスで盛んになった啓蒙主義は、「人類はたえず進歩するぞんす」と楽観的に考えていました。彼らがそう考えたのは、当時の自然科学の進歩をみれば無理からぬことです。啓蒙主義者の多くは、科学が進歩すればすべての謎が解けて宗教は消滅すると考えていました。19世紀のめざましい科学技術の発展の後、それは確信になった感がありました。しかし、20世紀、宗教はなくなり、かえって力をつけています（これが善いかは別にして）。

確かに学問というのは、ふつう時代が下ればそれだけ進歩します。自然科学だけでなく、歴史学や経済学や社会学などもそうです。なら、哲学も同じはずで、それゆえギリシア哲学なんて骨董品とも言えるようなもので、そんな思想なんぞ勉強する価値はない、のではないかと。

しかし、ギリシア哲学もスコラ哲学も依然としてその価値を失っていません。アングロサクソンの世界（合衆国やイギリス）では、20世紀の中頃からアリストテレスの復興というような現象が起こっています。ある専門家は「難しい言葉をまとめた『現代思想』に比べて、素朴ながらもかえって身近なところから、しかも大きなスケールで問題に取り組んでいるギリシア哲学は、今なお多くの示唆に富み、また汲めどもつきぬ謎に満ちている」（荻野弘之、『哲学の原風景』、3, 4頁）と言っています。でもなぜそんなに古いものが今にも通じるのでしょうか。問い方を変えると、なぜ科学が発達しても、哲学には関係ないという可能性があるのでしょうか。

それはそれぞれの学問が考える対象が異なるからです。自然科学は、前にもいったように物質（感覚で捉えられるもの）を対象とし、哲学は存在すべてを対象とします。唯物論者といわれる人たちは、「存在しているものはすべて物質だ」と言います。もしそうなら、自然科学の発達も、無条件に哲学を発達させるでしょう。実際、先日お話ししたギリシア哲学の始まりは自然科学者という人たちによるもので、この自然がどうなっているか、特に自然界が何から成り立っているか（つまりその材料）を探するという、クオークなどを探す現代の物理学者とも似ている視点を持っていた。しかし、彼らはこの問題を続けて考えていくうちに、自然界はただ材料がわかっただけでは理解できないということを見つけていきます。

というのは、私たちを取り囲む世界には物資でないものも多々見受けられ、それがなければ世界は理解不可能となるからです。たとえば、「原因と結果」、「変化」、「本質」、「存在」、「目的」、「価値」、「関係」などなど、「もの」としてはとらえられないものがいっぱいあるのです。ある人たちは、「そんなも

のは、人間の頭の中だけにある概念で、外の世界にはないものだ」と切り捨てますが、そうでしょうか（この問題はまた授業で取り扱います）。もし「原因と結果」が単なる頭の中だけに存在する概念なら、「昨晚 で起こった火事の原因は××でした」というのは、いったいどういう意味でしょうか。「この火事の原因というものは、私が頭で考えたことであって、本当はそうではありません」と言うべきでしょう。百歩譲って、これらの概念が空想の産物だとして、ではなぜその概念が何もないところから生まれてくるのかを考えねばなりません。それは哲学の仕事なのです。

また、これらの問題は、自然科学がきわめて幼稚であった古代や中世でも、すなわち顕微鏡も望遠鏡もなかった時代でも、深く考えることができました。だから、「この世界はいったいどうなっているのだろう」と素朴な疑問を持ち、いろいろと考えていった古代の人たちの言ったことを調べてみるのは、時間の無駄ではないのです。また、ことを人間に限れば、その神秘を探るには、専門的な自然科学の知識がなくてもできることは、古今東西の古典文学を読めばわかる。なぜ『つれづれ草』は今でも読まれるのでしょうか。一つはそこに綴られている吉田兼好の考えが、今の社会や人間にも十分に通じるからで、その知識を得るために兼行さんは近代の学問を修める必要はなく、独自の鋭い観察力と深い思考力で十分だったからでしょう。

ということで、古代ギリシアの哲学者たち、またその哲学の努力を続けた中世のスコラ哲学者たちの自然科学の知識が幼稚だからという理由で、彼らを馬鹿にしないように。ただし、ではギリシアの哲学者は現実を正確に把握し分析したかと言われれば、もちろん各自大きな限界がありました。それはキリスト教の立場から見ると、歴然とします。私が無条件に誉めているような印象を持たれるかも知れないアリストテレスは、たとえば奴隷は奴隷であるべきだと、すべての人間の本質的な平等については理解していませんでした。プラトンは人間の魂は生れる前はイデアの世界に生きていたと考えていました。

いずれにせよ、この限界はある程度仕方がないものだと思います。なにせ、存在全体を正確に把握するというのは、不可能なことだから。そこで、一人一人の哲学者の間違えをあげつらうのは卑怯と言えるでしょう。それより大切なことは、哲学者と言われる人たちが、この難しい試みにどれほどまじめに取り組んだのか、それを見ることではないかと思います。ただし、次回に説明しますが、哲学は人の人生観と世界観に影響しますから、明らかな間違いの場合、それを指摘する必要があると思います。ちょうど、薬屋さんが店に来たお客に向かって、「どの薬も役に立ちませ。なんでもすきなもの取っていきなはれ」といえば、悲惨なことが起こると同じように。

最後に、科学の進歩が必ずしも人間の幸福につながらないことは、20世紀の二つの世界大戦やナチスやソ連の全体主義国家の中で起こったおぞましい事件を見て、人類は痛感しました。科学の進歩は、しっかりした倫理観が伴っていない場合、原爆に象徴されるように、人間自身を不幸に陥れる可能性がある。その倫理観を教えるのは、哲学や宗教以外にはありません。また、科学が進めば進むほど、わからないことが多くなってきたのも事実です。誤解のないように言っておきますが、私は決して自然科学が役に立たないとか言うものではありません。資源の少ない日本は技術立国になるほか、発展は難しいでしょう。ということで、理科も一生懸命勉強してください。



追記：前回のプリントの修正です。物理学でも生物物理学や合成生物学という分野があり、そこでは生命構築の研究をしているので、物理学もこの種の分野では生命を対象としています。また生物学でも生体内の金属の働きや生体内金属輸送を研究している分野があり、生物学は金属を対象としないということはいけません、そうです。（ある研究所の先生からの訂正です。先生、ありがとうございます）